

としてゐることも擧ぐ可きである。彼の銅劍等に見られる刺突器が優勢であつた我が先史時代武器が古墳時代に入ると斬撃器に推移し、片刃の刀の發達となり、奈良朝以後之が一層盛んとなりその外装にも鍛工技術の上にも隋唐文化の影響を受けた事を述べてゐるが如き所論は當否は別としてその例とせられる。次に第三章では考古學的にこれら武器が夫々如何なるものと伴出するかいはゞ武器の他の遺物に對して占むる位置を述べたもので、此處では出土遺跡の性質分布他の伴出遺物自體の解説までが記るされて詳細であるし、その態度に於いて文献から明かにされ得る所をも併せて見て上代武器の社會性を論じてゐる。例へば上代武器の製作並びに管理に關する事項、神話等に見る武器の精神的位置、一般人の信仰、氏族社會に於ける武家の武技の問題にまで及んでゐる。

後篇は主として日本上代武器中の主要武器たる刀劍類を解説したものであつて、その多くは、何づれも古墳出土品である。其の記述は刀劍自體に對する技巧な説明の他に之が化學的研究の結果をも録して居り、また外装に於いては之を年代的に古墳時代と奈良時代のものに區別し形式的には實用的なものと儀仗的なものと區別してゐる。而して是等のうち鏢頭外装に依るものを金銅外装に依る頭槌大刀等と區別した上これが紋様、形式その他からその祖型に及び、所謂鏢頭大刀が大槌様式たる從來の所説を展開して之に對する我が固有様式として鹿角裝大刀や頭槌形大刀を我が前代の遺物の中に求めてゐる事は注意すべきである、鹿角裝に於いては更にその直弧文の起源を皮革の縫合と鹿角の使用に聯關

づけ填輪盾等をも引證して論じ之等の發生を獸類の多い先史時代環境に結びつけて考へようとしたのは傾聴すべきものである。後篇には、なほこれら主要武器の他に儀禮用武器に就いても録し實物の存せぬものは文献から之を推測してある。

要するに本書は日本の武器に就いて、單に武器自體の形態學的考察のみにとゞまらず、之がもつ歴史性を考察せんとされてゐる著者の用意を窺ひ得るものがある。これは京大考古學教室にあつて永年故濱田耕作博士指導の下に致學をつまれた賚と云ふ可きであらう。刀劍を單なる刀劍として終らさずに入類物質文化史の主要なる遺物類として考察しようとしたことは本書の特色と云ふ可く、よしやその所論なほ議すべき點が萬一あるとしてもその努力は高く評價せらるべきであらう。

因みに本書は、四六倍版で圖版七十五葉に挿圖一五二葉添へられ大部分コロタイプ版の高い實測圖、寫眞等が鮮明に出てゐる。(四六倍版本文、三五四頁、昭和十六年二月、弘文堂發行。定價貳拾六圓)〔藤岡謙二郎〕

日本佛教史論

堀 一郎 著

從來の日本佛教史の研究には、通じて一つの型とも云ふべき傾向があつたことは、動かすべからざる事實である。それは日本佛教を以て、世界宗教たる佛教の一派的存在に過ぎないとする立場

であつて、かゝる立場よりすれば、日本佛教は、畢竟移植せられ受容せられた外來文化であり、固有文化とは全く無縁な、或はその反對な破壊的要素とまで觀せられるのは、當然のことと云はなければならぬ。江戸時代の後期から佛教が批判の對象となつたのは、一面かゝる觀方が強くなつたのに基くのであるが、日本佛教史の研究者の多くは、佛教を峻烈なる批判から護らんとして努力しながら、その研究法は批判者と同様なところから、これに對抗することができず遂に今日の佛教界の萎微沈滞を招くに至つた。日本佛教を一つの宗派的なる存在とする研究法とは、これを端的に云へば文字の末に捉はれた狭い意味の實證主義的な傾向であつて、最近までの我が國に於ける歴史研究の最も大きな弊風であるが、それが最も著しかつたのが、佛教史の方面であつたことは疑ひない事實である。日本佛教を建設した先人の論疏を明らかにする場合も、文字の蔭に認められた直接的なる事實に就ては、深くも思ひ及ばずに、徒らに印度支那に於ける論疏と比較對照して、その間の字句の異同を穿鑿するに止まるものが多かつた。かゝる研究法が若い學徒の關心を惹かないのは當然であつて、最近我が國に於ては、日本佛教に關する研究が殆んど顧みられなくなり主として印度・西藏の經典解釋に全力が注がれてゐるのは、一面かゝる從來の研究の態度に由來するものと云へやう。併し印度・西藏の經典研究も單に解釋のみに終始する時は、却つて日本佛教を以て、その宗派的なる存在とする觀方を強化することとなり、佛教が我が國に於て國民の支持に依り始めて大成した事實を

見忘れる懸念がある。

かゝる際文部省國民精神文化研究所の堀一郎氏に依つて、「日本佛教史論」が著はされ、從來の研究法とは全く異なつた新しい立場が提唱せられたのは、誠に喜悅に堪へない。氏の立場は、その序言に簡明に表現せられてゐて、凡そ次の如きものである。即ち一個の精神文化が未知の國土に來つて、本質的なる發展を遂げるに就ては、その國土にその文化を育成するに足る胎盤と、更にこれを受胎する能力が存しなければならぬとし、かくして育成せられた文化は、それ自體の發生發展の經過の如何に關らず新らしき國民文化の創造、生成、圓熟であるとするのである。従つて國民の本質的の生活の内に播取せられた日本佛教は、氏に依れば日本人が神代の昔から傳統して來た惟神道のうちに行せられた一形態であり、日本の生活の表出以外のものではないとせられるのである。

氏はかゝる新しい見地から、上代佛教の國家的播受に就て日本書紀と佛教、書記佛教の文化史的背景とその日本の展開、佛教公傳と聖德太子「篤敬三寶」に到る國史的事情、天皇の愛民と上代の國家佛教の四篇に分けて精彩ある議論を展開してゐる。

就中著しいのは、我が國に於ける佛教育成の胎盤に關する部分であつて、從來の史家が歴史的表面的なる事實にのみ提はれて、佛教と我が國固有の神道との相尅を強調し、佛教の傳播に依る神道の歪曲を説くのに對して、氏は臣民を予の如くに愛せられる皇室の御仁慈と、天皇を親の如くに敬ひ親しままつる臣民の忠貞に

東亞人文學報 第一卷 第一輯

京都帝國大學人文科學研究所編

依つて、いみじくも築き上げられた惟神道こそは、佛教育成の胎盤に外ならぬとし、佛敎の流傳に依つて、惟神道は聊かも變化を齎らざなかつたとするのである。而して氏はこの新しき主張を裏書きせんがために、從來の史家に依つて既に取り上げられた奈良時代の金光明經信受の盛行の事實を再檢討し、王法正論を説く同經が、正しく受容せられたのは、印度・支那・日本の三國を通じて日本以外にはないことを確め、更に溯つて佛敎に於ける王法正論の思想發生の淵源を尋ねて、轉輪聖王傳説の源までに溯り、それが印度の先住民族たるドラヅガ族の包摂する理想、惹いては西はエデプト・スメールから、東は朝鮮、臺灣にまで擴まり、我が惟神道にも深い關係を持つと見られる日御子傳説と至深の關係を有することを強調する。

かくして我が國に於ける神佛二道の融合は、極めて深い根柢を持つとせられるのである。

氏の所論は以上の如く、アジア全般の宗教の本質に關聯する非常に雄大な構想を持つてゐるが、一面多數の史料を引用して、一々その所論を確證してをられるのは敬服に堪へない。氏の提唱せられた佛敎受容の胎盤に就ては、今後更に究明を要するものがあると思はれるが、今日我が國の最大使命が東亞に於ける新秩序の建設に在る時、かゝる内容を持つ論説が現はれたことに、大なる意義を認めずにはをられない。今後の著者の精進を深く期待する次第である。(菊版三四八頁、東京日黒書店發行)〔赤松俊秀〕

世界史未曾有の轉換期に當り、東亞新秩序建設の大任を背負ふ日本にとつて、「新東亞の建設に資すべき人文科學の綜合研究」は、まことに緊要なる課題である。

斯かる目的に副ふべく、一昨年八月京都帝國大學内に創建せられた人文科學研究所の成果如何は、人々の齊しく期待せるところであつた。此の時に當り、今回その第一回の報告として本學報の刊行せられたことは、實に意義のあることであり、慶びに耐へぬ次第である。

此の書を繙かれた人は、先づそこに溢るゝ熱烈なる興亞の意氣を感ずることであらう。「本學報の旨とする所は、東亞の現狀を明かにし、且之に本づく原理及び政策を考究するに在り」と巻頭に叫ぶ小島所長の發刊の辭に現れる精神は、そのまゝ、十四氏の論説、又書評を一貫してゐる。國家學に、社會學に、歴史學に、地理學に、或ひは法律學に、經濟學に、あらゆる人文科學の綜合研究が、一つの理念に副ふて心ゆくまで展開されて來る。そこに見られるのは正しき東亞の姿であり、又輝しき未來の東亞を豫見せしむるが如くである。

現下に於ける、皮相の觀察に墮せる、汗牛充棟も置ならざる東亞に關する出版物を讀破されるよりは、讀者よろしく先づ權威あ